

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	東京家政大学 児童発達支援事業所 わかくさ			
○保護者評価実施期間	2026年3月1日 ～ 2026年3月31日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	21	(回答者数)	21
○従業者評価実施期間	2026年3月1日 ～ 2026年3月31日			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	8	(回答者数)	8
○事業者向け自己評価表作成日	2026年5月28日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的にやっている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	・親子で通室する施設であること	子どもの姿を保護者と一緒に見守ることで、成長の変化やその子の特徴・特性などを理解し受け入れられるよう支援している。	・子どもの姿の共有から、さらに我が子の理解が深まるようなアプローチ（面談・自由遊びのなかでのお話など）を深めていく。
2	・豊かな環境に加え十分なスペース、設備がある施設であること	・戸外での療育を行い、自然に触れて季節を感じたり、水遊びをしたりする経験を多く取り入れている。	・学生との交流を企画し、いろいろな人と様々な経験ができるよう考えていく。

3	・大学ならではの知的財産を持っていること	・大学内に子どもに関わる学科があり、専門の教員と連携を取りながら療育を進めている。感覚プロフィールを通して、作業療法の視点から発達を確認している。	・付属の幼稚園、ナースリールームなどと共同で学習会等を開催したり、教員を招いての研修会などから、さらに専門性を高める。
---	--	---	---

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	・日々の記録や保護者との連絡帳が紙媒体であること	・ＩＣＴの活用なども考える必要がある。	・保護者と共有する必要があるものを精査し、効率的に事務作業ができる方法を模索していく。
2	・療育にあたるスタッフは保育士が主で、常勤のＯＴやＳＴが配置されていないこと	・ＯＴに関しては、リハビリテーション学科の教員に指導を受けながら療育を行っているが、子どもの特性や障害から考えるとＳＴ・ＯＴの配置は必要である。	・職種のちがいをどのように効果的に療育に活かせるのかを具体的に考える。
3	・子どもの発達の土台を育むことを大切にしている、行動の変容に直接アプローチする支援ではないため、保護者に支援の効果が伝わりにくいことがある。（療育の目的や意図がしっかり伝わらないと「遊んでいるだけ」と受け取られてしまう。	支援の意図や成長の段階や流れを保護者に丁寧に伝え共有する必要がある。	・支援のねらいや専門性を日々の療育の中で、わかりやすく言語化して保護者に積極的に伝えていく。